

さて、元CIA情報官フィリップ・ジラルデイは先述のチョスドフスキーとの共著論文とは別に、次のような氏独自の別の論考も書いています。

* Gaza Strikes Back. It's Another 9/11 or Pearl Harbor but Who Actually Did What to Whom? "This Was More Likely a False Flag Operation" (ガザの逆襲。それはもうひとつの9・11か真珠湾攻撃だ。が実際には誰が誰に何をしたのか。「これは偽旗作戦の可能性が高い」)
<https://www.globalresearch.ca/gaza-strikes-back-another-9-11-pearl-harbor/5836435> (November 05, 2023)

この論考の副題は次のようになっていました。

* "As a former on-the-ground intelligence officer, I am somewhat convinced that this was likely more like a false flag operation rather than a case of institutional failure on the part of the Israelis."
 (現場で元情報将校として働いてきた経験からすれば、これはイスラエル側の組織的失敗のケースというよりも、むしろ偽旗作戦であったと確信している。)

この副題からも分かるように、ジラルデイ氏自身も、先に紹介したエフラット・フェニグソン女史と同じく、軍の情報機関で働いた経験があり、彼女と同じ結論に達しているのです。

しかし、元CIA情報官ジラルデイ氏や元イスラエル諜報部員フェニグソン女史の主張を傍証する、もうひとつの情報があります。それを伝えたのが次の記事でした。

* Israel bombing 'everything but Hamas in Gaza' - Jackson Hinkle (イスラエルは「ハマス以外」のすべてを爆撃)
<https://www.rt.com/news/585948-israel-forcing-palestinians-out-hinke/> 27 Oct. 2023



元 CIA 情報官フィリップ・ジラルディ

これは「ハマス」がイスラエルにとって貴重な「軍事的資産」であったことを示しています。口では「テロリスト集団を殲滅する」と言いながら、それを存続させているのは、やはり利用価値があるからでしょう。

パレスチナ自治政府を担っているとされるアッバス議長が、「ガザ地区を実効支配しているハマスを解体して、西岸地区だけでなくガザ地区の管理も私に任せてください」と提案したとき、それをネタニヤフ首相は即座に拒否したことも、興味深い事実です。

やはり「ハマス」にガザ地区を管理させておくことは、ネタニヤフ氏にとって、それなりに価値のあることなのでしょう。

9

さて話が少し横に逸れたので、元の話題に戻ります。

先述のように、ジラルディとチヨスドフスキーの共著論文は、その長い題名の最後は次のようになっていました。

* Their Objective Is “to Wipe Gaza Off the Map?” (彼らの目的は「ガザを地図上から消し去ること」だった。)

では、この「ガザを地図上から消し去ること」とは何を意味するのでしょうか。そこでイスラエルの歴史を調べてみると、イスラエルは一貫して「ガザどころかパレスチナそのものを地図から一掃することを目指してきたことが分かりました。」それを、この共著論文は新しい小見出し「ネタニヤフ首相の『新たな舞台』を付けて、次のように述べています。

Netanyahu's "New Stage" "The Long War" against Palestine
 ネタニヤフ首相の「新たな舞台」、パレスチナに対する「長い戦争」

ネタニヤフ首相の掲げる目的は、パレスチナ人に対する75年戦争（一九四八年のナクバ以来）の新たな段階を画するものであり、もはや「アパルトヘイト（人種隔離）」や「分断」が前提ではない。

この新たな段階は和平を望むイスラエル人に対しても向けられているが、パレスチナの人々を自らの土地から「完全に排除する」だけでなく、「徹底的な領土化」を目指すものである。

ネタニヤフ首相は二〇二三年一月に次のように宣言している。

「これが私の率いるイスラエル政府の基本路線だ。ユダヤ民族は、イスラエルの土地のすべての地域に対する排他的で疑う余地のない権利を有する。政府は、ガリラヤ、ネゲブ、ゴラン、ユダヤ、サマリヤなど、イスラエルの土地のあらゆる場所での入植を推進し、開発していく」

つまりネタニヤフ首相は、「我が政府の基本政策は、パレスチナの土地からすべての住民を徹底的に追い出してイスラエルの領土にすることを目差すものだ」と宣言したのです。

しかも、「これはパレスチナ人だけでなく平和を望むユダヤ人も念頭においた宣言だから、イスラエルに住むユダヤ人もそれ相当の覚悟をしてくれ」との要請または脅迫でもあったわけです。

10

もうひとつここで注目しておきたいことは、ネタニヤフ首相の掲げる目的が「一九四八年のナクバ以来」の、パレスチナ人に対する「75年戦争の新たな段階を画するもの」とされていることです。

ここで言う「ナクバ」とは、今までイギリスの委任統治領だったパレスチナの地に、ユダヤ人が一方的にイスラエル建国宣言をして、イスラエル軍によって70万人のパレスチナ人が強制的に追放されたことを指します。

最近では権力にたいする追従記事を書くウイキペディアでさえ、このナクバについて次のような説明をしています。



消滅するパレスチナ

ナクバの基礎をなす一連の出来事は一九四八年の第1次中東戦争中およびその直後に発生した。すなわち、イギリス委任統治領パレスチナの78%がイスラエルとして宣言され、70万人のパレスチナ人が追放されたこと、

500以上のパレスチナ人の村落がイスラエル軍によって破壊され、地名の変更が行われたこと、さらに難民の帰還権が否定されたこと、恒久的な難民の形成、パレスチナ社会の破壊などである。ベニー・モリスやイラン・パツペなどの歴史家やサルマーン・アブー・シッタなどのナクバの研究者は、このようなパレスチナ人の排除は「民族浄化」にあたるとしている。

このようにパレスチナ人は一九四八年に「イギリス委任統治領パレスチナの78%」を奪われ、その帰還権も否定されて70万人が難民となったわけでは

が、残された28%の領土も決して安泰ではありませんでした。その後もイスラエルによるパレスチナにたいする侵略は止むことがなかったからです。右の地図を見ていただければお分かりのように、パレスチナの領土は奪われる一方で、見るも無惨な状態です。

11

しかし、ハマスによる奇襲攻撃を口実とした今度のイスラエル軍の総攻撃は、「第2のナクバ」になりかねない勢いと規模をもっておこなわれています。

いつもはアメリカに遠慮してはつきりものを言わない国連事務総長すら、ロイター通信によれば(一一

月八日) 次のように発言しています。

国連のグテレス事務総長は一月八日、パレスチナ自治区ガザにおける民間人の死者数は、イスラム組織ハマスに対するイスラエルの軍事作戦の「何かが間違っている」ことを示しているという認識を示した。

グテレス氏はロイターネットワークで「人間の盾」戦術を利用する「ハマスにも違反はある」としつつも「軍事作戦で殺害された民間人の数を見れば、明らかに何かが間違っている」と語った。

人道危機にさらされているパレスチナ市民の悲惨な映像は「世界的な世論という点でイスラエルに有益ではない」とし「イスラエルの利益に反しているとイスラエルが理解することも重要」と述べた。

(中略)

一〇月七日に起きたハマスのイスラエル奇襲によって1400人が殺害され、240人超が人質となった。ガザ当局によると、その後のイスラエルの攻撃でこれまでに1万569人が死亡し、そのうち40%が子どもという。



「イスラエルに殺された」大勢のパレスチナの子どもたち

グテレス氏はガザでの子どもの犠牲について、国連が毎年確認している世界の紛争による子どもの死者数をはるかに上回っているとし、「数日間に何千人もの子どもが殺されている。これは、軍事作戦のやり方に明らかに何か問題があることを意味している」と改めて述べた。

<https://jpr.futures.com/world/security/APRH/WZ7WKZIXNLQHG6GNDSTYLP-2023-11-08/>

イスラエル軍はガザ最大の病院すらも爆撃する残酷さです。

民間人や民間施設を爆撃することは明らかに「戦争犯罪」ですが、ネタニヤフ氏にしてみれば、「このような攻撃をしない限りパレスチナ人は、自分の領土を放棄して脱出しないだろう」と考えているのかも知れません。

その証拠に、最近あきらかになったイスラエル軍の機密文書は、「ガザの230万人をエジプトのシナイ半島に追放するという計画」があったことを示しています。次の記事を御覧ください。

* Leaked Israeli Intelligence Ministry Document Proposes Complete Ethnic Cleansing of Gaza (漏洩したイスラエル情報省の文書、ガザの完全な民族浄化を提案)

<https://newsantwar.com/2023/10/30/leaked-israeli-intelligence-ministry-document-proposes-complete-ethnic-cleansing-of-gaza/> October 30, 2023 by Dave DeCamp

12

すでに述べてきたように、今度のイスラエル軍による大虐殺は「第2のナクバ」をめざしたものではありません。いかと多くのひとに思わせるほど凄まじいものです。

しかも恐ろしいことに、イスラエルという国はこのような「民族浄化」をおこなう権利を神から与えら

れていると考えているらしいのです。先述のように、ネタニヤフ首相は二〇二三年一月に次のように宣言していたからです。

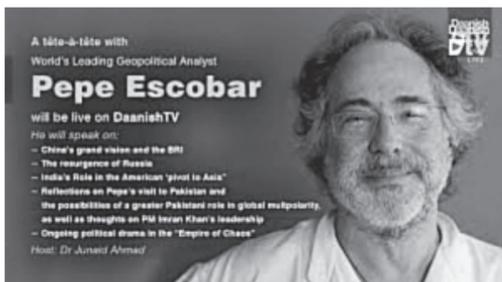
これが私の率いるイスラエル政府の基本路線だ。ユダヤ民族は、イスラエルの土地のすべての地域に対する排他的で疑う余地のない権利を有する。政府は、ガリラヤ、ネゲブ、ゴラン、ユダヤ、サマリアなど、イスラエルの土地のあらゆる場所での入植を推進し、開発していく。

しかも、このような権利は、旧約聖書（申命記7:1-23）に書かれているとおり、「ユダヤ民族に神から与えられたものだ」と言うのです。このことを明確に指摘しているのが高名な評論家ペペ・エスコバルの次の論考です。

* Nakba 2.0 Revives the Necon Wars (ナクバ2.0がネオコン戦争を復活させる)
<https://strategic-cultures.eu/news/2023/10/30/nakba-2-revives-necon-wars/> October 30, 2023. Pepe Escobar

この論考の最終部分でエスコバル氏は次のように述べています、少し長くなりますが引用します。

一方で復讐心に燃え、ナルシストで、政治的欺瞞と道徳的免罪の達人である征服者の部族（ユダヤ人国家イスラエル）は、その「ナクバ2.0」を固めることに深入りしている。それはガザ沖のガスを不法に食い尽くすための完璧な解決策でもある。



ペペ・エスコバル



イスラエルの海底ガス開発計画

230万人のパレスチナ人に影響を及ぼすイスラエル情報省の国外追放指令は極めて明確だ。それは一〇月一三日に同省によって公式に承認された。それはガザ北部からすべてのパレスチナ人を追放することから始まり、連続的な「陸上作戦」が続き、ラファのエジプト国境を越えるルートを開ける。そして、エジプトのシナイ半島北部に「テント村」を設立し、その後はエジプトに「パレスチナ人を再定住させる」ための新しい都市さえも設立する。

御覧のとおりイスラエルの情報省は密かに「パレスチナ人の国外追放指令」を策定しているといふのです。そしてエジプトにパレスチナ人を移住させ、空いた土地をイスラエルが領有するということです。

これは、同時にガザの沖合に発見された天然ガスを採掘するという裏の計画とも連動しています。「ガザ地区」が存在する限り、その領海に存在する「液体天然ガス」の海底油田に手を出すことができないからです。

上の地図はガザとイスラエルの近海に存在する油田の地図です。

この地図は、次の論考に載っていたものを借用したものです。これを見れば、いかにイスラエルがパレスタナ全土から住民すべてを放逐したいかの理由が分かるのではないでしようか。

* Ben Gurion Canal Behind Canada-US Motive for Backing Israel's Genocide (イスラエルの大量虐殺を支援するカナダとアメリカの動機の背後にあるベン・グリオンの運河)

<https://liby3360.wordpress.com/2023/11/13/ben-gurion-canal-behind-canada-us-motive-for-backing-israels-genocide/> November 13, 2023 | TruthBomb Media

上記論考の題名に「ベン・グリオンの運河計画」というものが出てきますが、これについては、後で項を改めて詳しく説明するつもりです。

13

そこで、もう一度ペペ・エスコバルによる先述の論考に戻ります。なぜなら、自称「神に選ばれた民族」が、一九四八年の「ナクバ10」以来、75年間にもわたって、なぜ傍若無人な行動を続けてきたのかを、エスコバル氏は論考の末尾で、旧約聖書の「申命記」を引用しながら、次のように説明しているからです。

さて、申命記1:22-24に戻ろう。

「ヤハウェはイスラエルに、『あなたたちよりも偉大で強い7つの民』を特定し、『滅びの呪いをかけなければならぬ』と告げ、『いかなる憐れみも示してはならない』と告げた。

彼らの王たちについては、『あなたは天からその名を消し去るであろう』」

この「申命記」というのは、「旧約聖書の〈モーセ5書〉の一つで、約束の地カナンに入る直前、モア

ブの地でなされたモーセの最後の説教」だそうですが、上で引用されているのは、その第7章の1節、2節、24節です。

また「ヤハウエ」というのは、「旧約聖書にあらわれるイスラエルの最高神」で、キリスト教徒が「エホバ」と読んでいるのは、旧約聖書の「ヤハウエ」を誤読したからだそうです。

それはともかく、御覧のとおり、イスラエルの神はユダヤの民に、「自分たちに刃向かうものはすべて殺し尽くせ」「哀れみをかけてはならない」「自分たちより強い民の王を地上から消し去れ」と言っています。

まさにユダヤ教原理主義者のネタニヤフ首相が言っていることそのままです。「いまイスラエル軍がガザ地区でやっていることは、ユダヤの神が命じていることを実行しているだけだ」とネタニヤフ氏は言うに違いありません。

ところが調べてみると、このネタニヤフ氏がめざしている「民族浄化作戦」は、単にパレスチナ人を「ガザ地区」や「ヨルダン川西岸地区」から追い出してパレスチナ全土をイスラエルの領土にすることだけを目的にしているのではないということが分かりました。

ユダヤ教原理主義者がめざす目標はもっと遠大・宏大だったのです。というのは、旧約聖書「創世記」15章18～21節には、次のように書かれているからです。

その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。

「わたしはこの地をあなたの子孫に与える。エジプトの川から、かの大川ユーフラテまで。

すなわちケニびと、ケニジびと、カドモニびと、

ヘテびと、ペリジびと、レバイムびと、
アモリびと、カナンびと、ギルガシびと、エブスびとの地を与える」
<https://www.worproject.org/bibles/jp/01/15.htm> (日本聖書協会)

すなわち神はユダヤ人に「エジプトのナイル川から、西アジア最長のユーフラテス川まで」の広大な土地を与える約束をしたというのです。いわゆる「約束の土地 Promised Land」です。

神は「これを目差せ」と命じているのです。

このことを実現するために、旧約聖書「申命記」では、「あなたたちよりも偉大で強い7つの民を滅ぼせ」と命じたようですが、ここでは滅ぼすべき対象として、「ケニびと、ケニジびと、カドモニびと」など、10の民が指定されています。

これが現在のどの国をさすのか分かりませんが、著名なジャーナリストニステファン・レンドマンの論考は、次頁のような地図を載せています。

* What Israel Fears Most : An Encroachment to "Greater Israel"? (イスラエルが最も恐れるもの: 「大イスラエル」への侵食?)
<https://www.globalsearch.ca/what-israel-fears-most-an-encroachment-to-greater-israel/5564905> (December 12, 2017)

14

この地図を見ていただければお分かりのように、「大イスラエル構想」は、旧約聖書「創世記」15章18〜21節で書かれているように、「エジプトのナイル川から、西アジア最長のユーフラテス川まで」の広大



「大イスラエル」構想

な土地を占めています。(黒い太線で囲まれている部分)
 しかも、このイスラエルによる「民族浄化作戦」は、レントマン論考にもあり、「大イスラエル構想」と呼ばれていることが分かります。つまり、旧約聖書で約束された宏大な領地「大イスラエル」を実現しようという計画です。

それにしても、旧約聖書で約束された土地だから、そこにパレスチナ人という先住民がいても追い出す権利があるという考え方は、信じがたいものです。このように考えると、旧約聖書は、なんと恐ろしい文書でしょうか。

いくらユダヤ人が「神に選ばれた民」だからといっても、それは旧約聖書に書かれているに過ぎないのですから、それを根拠にひとの土地を奪ったりひとを殺しても許されるというのは、現代の国際法や人権感覚からすると、許されざる「戦争犯罪」でしょう。

しかし、このような恐ろしい行動をとるネタニヤフ政権あるいは歴代のイスラエル政府をアメリカの歴代政権は支持し続けてきたのです。

アメリカも、自称「神に選ばれた国」として、インディアンと呼ばれる先住民を強制移住させたり殺し尽くした

これを見れば「ガザ地区」住民の存在がその計画遂行にとっていかに障害になっているか、「大イスラエル構想」がいかに必要かが分かってもらえると思います。住民を「追放」または「殲滅」したいもう一つの理由です。



ベングリオン運河 (Ben Gurion Canal) 計画の予定ルート

<https://libya360.wordpress.com/2023/11/04/palestinian-genocide-and-dispossession-and-israels-ben-gurion-canal-project/>

りしてアメリカという国をつくってきたのですから、「亀は甲羅に似せて穴を掘る」「同類相憐れむ」と言うべきなのでしょうか。

〈追記〉

ゆとりがあれば、イスラエルが密かに目論んでいる「ベングリオン運河計画」についても説明する予定でした。

が、載せたいことが多すぎてその取捨選択に困り、この章を書くのに3日もかかり疲れてしまいましたので、今回は断念することになりました。

そこで、その密かに計画されてきた運河計画の地図だけでも紹介しておこうと考え、それを上に載せておくことにします。

〈本章のキーワード〉

モサド (Mossad) イスラエルが「世界」と誇る諜報機関・暗殺部隊)

ハマス (Hamas) パレスチナ「ガザ地区」を拠点とするイスラム原理主義勢力)

ヒズボラ (Hizbollah) シーア派イスラム原理主義勢力、レバノンを拠点に活動)

PLO (Palestine Liberation Organization) パレスチナ解放機構、世俗主義的組織)

大イスラエル構想 (Greater Israel)

ハマスによる奇襲攻撃は「やらせ」だった!?

ベングリオン運河計画 (Ben Gurion Canal Project)

旧約聖書「申命記」7章1節、2節、24節、「創世記」15章18～21節

ナクバ (Nakba) 一九四八年のイスラエルによる「大厄災、大惨事」「民族浄化作戦」)

エフラット・フェニグソン (Efrat Fenigson) 元イスラエルの女性諜報部員)

フィリップ・ジラルディ (Philip Giraldi) コラムニスト、元CIA情報担当官)

ベンジャミン・ネタニヤフ (Benjamin Netanyahu) イスラエル首相、右派政党リクードの党首)

ペペ・エスコバル (Pepe Escobar) ブラジル生まれの高名な評論家)

ステファン・レンドマン (Stephen Lendman) ジャーナリスト、二〇一三年五月九日に死去)